



文部科学省
IB教育推進コンソーシアム

TEACHER TESTIMONIAL



松尾周氏(高知県香美市立香北中学校)

現在中学校教員として9年目。香北中では7年勤務し、MYPコーディネーターを務める。
中学高校国語担当。

「議論と実践を繰り返しながらIB教育を実現。教師は伴走者で生徒と共に進む」

もどかしさや不安を抱えたIB教育のスタート ワークショップで感じた新たな授業への認識

IBに関わる事になったのは、2019年8月の言語と文学のワークショップに参加したことが始まりでした。同年10月に本校がIBの候補校となり、私はコーディネーターとしての役割を担いましたが、後々その職責の重さに気が付くことになりました。その頃、私は研究主任という立場で授業研究などは校内で統括していたものの、「IBとは?」という問いに自分の中での答えの軸が定まっていなもどかしさや不安を抱えながら、先生方をリードし始めなければなりません。ワークショップに参加して一番印象的だったのは、授業自体が変わらなければいけないという実感でした。IBの理論を学んでいく中で、構成主義など概念は知ってはいましたが、実際に教育レベルで実践するという事はなく、改めて学習の意味の構築をしていかなければいけないと思いました。学習者自身が実践していくことの具体的な実感を得られたのが印象深かったです。参加されていた先生方は、みな学ぶ意欲のある魅力的な先生方で、この時に会った先生方とはネットワークが強固に構築されていて、コロナ渦にある現在でも、ずっと情報交換をさせていただいています。

コーディネーターとして奔走

一緒に実践しながら理解を深め教科を超えた協働へと

コーディネーターは、現場の先生方の変わるきっかけを作ったり、それを後押ししたりする仕事だと思っています。初期段階ではIB特有の言葉を戸惑いながらも使いつつ、概念・探究についての捉え方についても職員研修を徹底的

に行い、実践しながら理解するよう努めてきました。そうやってお互いの理解をすり合わせ、誤解部分を訂正しながら実践していく方向に向かっていく事になります。

まずは私が率先して実践した授業を見てもらい、議論していくという繰り返して、2年目以降は先生方の実践が少しずつ積みあがり、それに対する改善点などの提案を含めた対話が繰り返されることで定着していきました。先生同士の関わり方もかなり変わってきたと感じます。IB教育を取り入れる前から、異教科でチームを組み研修するという仕組みはありましたが、それぞれ教科の垣根を超えて議論し合うという事はなかなかできていませんでした。探究の問いには三つあり、具体的な問いというのはどうしても教科の専門性が出てしまいます。しかし、それからもっと昇華した部分、概念的な議論や問いを扱うためには、他の文脈に置き換えても捉える必要があります。こうした議論を経る中で、教科を超えた協働が促進されたのが最も変化したところだと思います。評価の仕方に関しても議論が白熱し、従来の評価の仕方を省みて、教員と生徒との間で行う評価基準の共有がいかに重要であるかを感じ、子供たちとどのように共通理解を得るかについても議論を繰り返しました。そうして、どうしたら子供たちの活動が活発になるかについて、真剣に話し合える職員集団になってきました。また、教員同士でお互いに問いを投げかけあうことを大切にするという実践が、子供たちにも波及しています。

抽象的ではありますが、子供たちも自分達で授業を作っているという当事者意識が芽生えたと感じています。授業は教員が提供し、子供は受け取るだけという認識から、子供たち自身が理解を構築したものを、教員が後押しし、そこから子供たちは更なる意味を見出していくという循環が全教科で行われるようになりました。子供たちが自分で問い

を立て、いかに派生させていくかを意識する事で、当事者意識や主体性の姿勢においてとても成長しています。

公立学校だからできるところを開拓 地域を巻き込んで、学びを築く試み

IBの導入が決まった初期段階では、地域や保護者の方もIB教育に関して知らない状態で、自分たちの受けてきた教育との違いに驚いたりもしましたが、子供たちの姿が変わっていくのを見て、皆さん感じる部分があったようです。2020年度より、当時の校長が生徒主体で学校行事を進める方針を打ち出し、例えば体育祭では実行委員を立ち上げて、子供たちが要綱から作成し、それを職員会にあげるという仕組みを作りました。あくまでも生徒が運営する学校行事というスタンスが貫かれ、同様に文化発表会、総合的な学習の時間の発表会などにも周囲の関心が高まってきた実感があります。子供たちの発表を地域の方や保護者の方が見て、実際に彼らの成長を感じていただいたのが第一段階でした。そこから、興味を持ってもらい、こうやって学校が変わるのだと少しずつ理解していただき、地域や保護者の協力を仰ぎました。

公立学校だからできるところを開拓していくのが私たちの一種のアイデンティティーだと捉え、地域をいかに巻き込んでいくかという事に力を入れ、時間をかけてきました。年度始めのPTA総会の後には、IB教育は何かというワークショップ形式の説明会を開いたり、参観日や週末に時間を設けて、地域の方を集めたワークショップや子供たちの発表の場を設けたりするなどの取り組みをたくさんしてきました。一番反響が大きかったのは、本校のコミュニティープロジェクトの最終発表会でした。この3年間で積み上げてきたものを発揮して発表するゴール地点を見ていただき、「すごく良かったね」「すごく成長しているね」というお声をたくさんいただきました。子供たちはゴミ拾いやグラウンドの草取りなどの活動に関しても、自分たちで主導的に地域に広報活動をし、実践するまでになりました。これまでも、地域をベースにした探究活動には取り組んできましたが、私はもっと地域の専門家を取り込んで、教員のみが教育に携わるというのを変えたいと思っています。教師は先導役ではありますが、地域全体に学びのプロセスを根付かせて、どんどん発展させていくことが良いと思っています。

IBを実践した子供たちの学びとは

この3月に、3年間MYPを学んできた初めての学年が卒

業しましたが、「何のために学ぶか」ということがわかって良かったという反応が非常に多かったです。学んだことの理解を何に繋げるかというのが、各授業ではっきりしているので、学びの背景を理解しながら学ぶことができたのだと思います。また、PYPを学んできた子供たちについても、自分の意見を持っている子供が非常に多いと感じます。言語と文学では視覚教材の取り扱い方が従来の国語とは違い、映像資料、ドキュメンタリーやコマーシャルがどのような影響を与えたりするかなどを詳しく分析します。子供たちはPYPでまとめたり、プレゼンテーションの技能を学んだり、広報活動なども繰り返してきたので、視覚教材に対する理解も深いものを持っています。また、MYPに移行しても学習者像やATLスキルなど、通過するポイントが地続きなので、学びにおける気づきが続く良さがあります。進級後の4月初めに行う仲間づくりのレクリエーションでも、学習者像を使って行う活動を企画するなど、シームレスに繋がっていました。

こうやってIB教育を経験することで、将来、地域社会の発展のために、コミュニティーにいかに関与するかをグローバルからローカルまで広く考える姿勢や意識を持った子供たちを輩出できることが大変意義深いと感じます。また、言葉だけでなく行動レベルで多様性を理解しているような子供たちが、社会へ出てその力が発揮されていくことに期待をしています。

IB教育に関心がある方々へのメッセージ・アドバイス

生徒も教員も変わります。IBを導入する事で、子供たちが当事者意識を感じる事ができます。IBとは教員は教えるというよりも、伴走するという姿勢を大切にしているプログラムです。教員がこのことを理解し、実践し、子供たちがそれに応えるといういい循環が学校文化として根付いていくことがメリットであると思います。

どこの学校でも、探究的な学習や生徒の主体性を求める事がIB教育に限らずあると思いますが、それはどこか抽象的で、どうやったら子供たちの主体的な姿が見られるのか、というぼんやりとしたもどかしさを抱いているのではないかと思います。そういった自治体や学校があれば、IB教育にある明確な言葉や評価基準が助けになると言いたいのです。こうしたフレームワークをうまく利用しながら、探究する子供たちや主体性のある子供たちを育成していく事ができるのではないかと思います。